

第三回 平成二十五（二〇一三）年六月十五日

茶の湯とやきもの

岡 佳子（おか・よこ）

総合文化学部の岡佳子でございます。今回は、「茶の湯とやきもの」というテーマでお話したいと思います。私はこの大学で日本文化史を教えており、「日本美術工芸史」で日本陶磁史を講義していますが、そこで茶の湯のやきものを取りあげています。この公開講座の目的は、今、大手前大学で行われている講義を、一般の方に聞いて戴くことですから、講義内容に則して、今回はお話ししたいと思います。

近頃の学生は、茶の湯についても陶磁器についても何も知りません。私は、「日本美術工芸史」の最初の時間に数点の陶磁器を学生に見せます。ある時、「なぜ陶磁器の表面はこんなにつるつると光沢があるのでしょうか」と学生に聞きました。陶磁器は土で器物を成形した後、釉薬ゆうやくを掛け窯に入れて焼きますが、釉薬の成分はガラスと同じですので、高い温度で焼くと溶けて土の上にガラスの皮膜ができます。しかし、その学生は、「ニスを塗っているのではないか」と答えまして、哑然おどろといたしました。

茶の湯に関しても同様です。私の母親の世代は女学校で「お茶」を習っておりました。私も花嫁修業と

して「お茶」を習いました。したがって、私の大学時代、大半の学生には茶の湯の知識がありました。しかし、今の学生の周辺には「お茶」がございません。わずかに高校に茶道部があり、文化祭の時に抹茶を飲んだことがあるといった程度です。

そういった学生への講義は基礎的なことに終始しますが、ここにご参加の皆様は私の年齢の前後の方だと思いますので、「お茶」をご存じない方は少ないと思います。そこで、日本で茶の湯が始まった南北朝から、桃山時代前半までの茶の湯に使われたやきものについて、上級編のお話をいたしたいと思います。

茶の湯とは何か

まず茶の湯とは何かということから始めたいと思います。お茶を飲むことは、我々の日々の暮らしで欠かせません。朝、一日を始める時にお茶を飲む方もおられますし、食事の時には必ずお茶を飲みます。茶を喫する、すなわち喫茶は日常的な行為です。しかし、茶の湯は日常的な行為ではありません。茶の湯は茶会が中心となります。茶会では、亭主が客を招き、懐石、つまり食事を出し、抹茶の濃茶と薄茶を振舞います。最も正式の茶事は昼に行う正午の茶事ですが、ちょうど四時間位かかります。この茶事を行う

ために、お茶のお稽古に通い、特別なトレーニングをして作法を学びます。

茶会は茶室、数寄屋とも言いますが、このような特定の場所で茶事は行われます。特別の型、すなわち作法さほうに基づいて、客に懐石や茶を振る舞います。茶を点てるためには点前てまえも必要です。茶入、茶碗、水指みずさし、建水けんすい、香合かうごうなどの特殊の道具を使います。特定の場で、特別の型で、特殊な道具を用いて行う喫茶は、じつは非日常の行為です。「日常茶飯事にちじょうさはんじ」という言葉がありますが、茶を飲む、飯を食べるという日常を日本人は茶の湯という非日常の行為へと高めました。

芸能史の分野では、茶の湯は室内芸能に分類されます。茶室は舞台です。演者は茶を点てる亭主ですが、亭主は作法・点前という型の稽古を重ね、舞台に立ちます。招かれた客はそれを見る観客です。茶道具は舞台に必要な小道具でしょう。皆様方が劇場に足を運ばれ、まったく日常とは離れた能や歌舞伎などの舞台芸能を鑑賞すると同様なことが茶室で行われる訳です。

南北朝から室町時代の会所の茶の湯——闘茶の時代——

特定の場所と型、道具で喫茶を行うことが茶の湯の始まりということになりますが、日本における始まりはちょうど南北朝期、十四世紀前半だといわれています。その始まりの頃の茶の湯について述べたいと

思います。

茶の湯では、抹茶、つまり茶の葉を粉末にして湯を注ぎ茶筥ちやせんで混ぜて飲みます。この抹茶法は中国で宋代に始まります。宋代は日本では鎌倉時代に当たりますので、鎌倉時代に抹茶法と喫茶用具が中国から日本に伝来しました。これらを日本に運んできたのは禅僧たちです。たとえば、日本に臨済禅を伝えた策西は『喫茶養生記きつさようじょうき』を著し、それを鎌倉幕府の三代将軍源実朝に献上しました。『喫茶養生記』に記載されていたのが、宋代の中国の禅宗寺院で行われた抹茶法でした。

鎌倉時代の抹茶法や唐物喫茶具の流入を背景に、室町時代初期、南北朝期に茶の湯が成立したと考えられています。当時の茶の湯を記載した『喫茶往来きつさおうらい』に、二階建ての喫茶の亭で、唐絵からえや唐物からものを飾り、食事の後、中国の禅院で行われていた作法で茶が振る舞われたことが記載されています。特定の場と作法で喫茶が行われたわけですから、この頃に萌芽的な茶の湯が始まったと思われるます。

やがて十五世紀初頭には、足利将軍と守護大名たちを担い手として、「書院茶湯」とか「殿中茶湯」と言われる茶の湯が盛んになります。これは会所と呼ばれた十二〜十六畳の書院座敷において、唐物の茶具足を使って行う茶の湯です。私は「具足ぐそく」と申しましたが、当時は、まだ「道具」という言葉が使われておらず、喫茶具は「茶具足」と呼ばれました。この時期には中国風の作法で茶を点じた後、闘茶とうちやが行われました。闘茶は茶を飲み比べて産地を当てて、当たった人が唐物の掛け物を取る、いわば、賭け事の遊び

でした。

では、これまでお話しましたことを、画像資料などをもとに詳しく見ていきたいと思います。十二世紀の中国宋代の喫茶の様相が分かる絵画に、周季常・林庭珪筆「五百羅漢圖」（大徳寺蔵）のなかの一幅があります。ここでは、羅漢らかん、すなわち仏道の修業者が手に持った天目台の上の天目に、従者が湯を注ぎ、茶筌で抹茶を点てています。南北朝期の文献である『喫茶往来』に記載された中国風の作法と共通するものです。日本に伝来した当時、中国風に椅子に座って行われましたが、書院座敷の発達とともに、やがて座って行われるようになりました。

夏も近づく八十八夜に茶摘みを終えた茶葉を茶壺に詰め、木の蓋をして和紙で口を密封し保管します。秋から冬にかけて茶壺の口を切り、茶葉を石臼いしうすで挽きます。これが抹茶です。高知県の吸江寺には一三四九年の銘をもつ古い石臼が残り、南北朝期から石臼で茶が挽かれたことが分かります。

本願寺第三世覚如かくじよの伝記を描いた、一三五一年、つまり南北朝末期の「慕婦ほき絵詞えこは」（本願寺蔵）には、初期の会所かいしよの有様さまが描かれています。この頃の建物はまだ寢殿造ですので、床は板敷で、参加者は皆、敷しき置だたみに座っており、奥の壁に三副一對の掛け物が掛けられ、前に唐物青磁の香炉と花を立てた一對ごの古銅の花入どうが置かれています。これが当時の座敷飾りです。中央の絵は歌聖と言われた柿本人麻呂像で、漆台には短冊や巻物が置かれていますので、ここで行われているのは和歌の集いである連歌会れんがえと分かります。

す。会所の隣の廊下に炉と釜が据えられ、塗り物の水指が置かれています。また台所の棚の上には、朱塗りの盆の上に、天目台と天目、茶入や茶筌が置かれています。これらは連歌会が終わって会所で行われる鬪茶のために準備された品でしょう。この絵巻から、南北朝期には、連歌、あるいは組香くみかう、立花りっかなどが茶の湯と同一の場所で行われたこと、また、今のように客の目の前でお茶が点てられるのではなく、別の場所所で茶が点てられ客の前に運ばれたことも分かります。

やや時代が下り、室町時代の將軍家の会所のひとつ、泉殿いずみどのの有様を描いた絵画が「祭礼草紙」（前田育徳会蔵）です。ここでも泉の側に炉と釜が据えられ、側には大きな陶製の甕が水指としておかれています。従者がそこで点てた茶を盆に乗せて会所に運んでおり、ここでも会所と別の場所所で茶が点てられています。これに続く画面が会所座敷となります。会所の中には、花を生けた多くの花瓶が置かれており、これが將軍と大名たちによる七夕りっかえの花会なわらびと分ります。「慕帰絵詞」で描かれた室内は板張りでしたが、「祭礼草紙」では畳が敷きつめられ、床とこの間まもあります。畳敷も床の間も実は寢殿造の後に出現した書院造という住宅様式やうしやうの特色です。

一四七〇年代に建てられた八代將軍足利義政の東山殿会所の指図を、当時の記録から起こしてみますと、東山殿会所は完全な書院造の座敷と分かります。会所として使われたのは「石山の間」と「狩の間」ですが、ここには床・棚・書院が設けられています。書院はちょうど出窓のようなもので、ここから書院

造という言葉が生まれました。また、左側に会所とは別に茶湯の間がありましたが、ここに風炉と釜を据えて茶を点て、将軍と大名達が待つ会所座敷に運ばれました。

さらに時代が下った室町末から安土桃山時代の「酒飯論絵巻」(三時知恩寺蔵)からも、書院座敷の有様がよく分かります。ここでも茶は別室で点てられています。座敷は畳敷で、襖や床が認められます。私は授業の時に、学生に「慕婦絵詞」と「酒飯論絵巻」の図を見せて何処か違うかを質問し、寢殿造から書院造への移行を促したのが床や書院・棚に唐物や唐絵を飾ったからだと言義するのですが、近頃では床の間のある和室をもつ住宅が少なくなっていますので、大変苦労します。

会所の飾具足と茶具足

書院には、どのように唐物具足が飾られたのでしょうか。室町将軍足利義政の座敷飾の次第を記載した『君台観左右帳記』などによれば、床の間の中央に三幅一對の唐絵を掛け、前に燭台、香炉、花入の三具足が置かれます。違棚の下の段には青磁の植木鉢などの飾具足があり、上の段に茶具足が飾られています。具体的に唐物天目や天目台、茶入などです。

床の間に飾る唐絵は、牧谿、梁楷といった中国宋代の画人たちが描いた水墨画です。鎌倉時代に日宋貿

易によつて、日本に請来されたものです。室町時代になると書院座敷の床に飾られるようになります。南宋時代、中国浙江省の龍泉窯りゅうせんで焼かれた青緑色の美しい砧青磁きんせの花瓶や香炉、金属の古銅の花入、赤漆を何層にも塗りかさね花鳥文を彫り入れた堆朱手箱ついでばこなどが床や棚に置かれます。一方、茶具足では、龍泉窯の青磁茶碗、中国南部の窯で焼かれた茶入、そして天目があります。天目の多くは、中国福建省の建窯で焼かれ多量に日本に輸入されました。

室町時代の会所座敷で使われた茶具足は全て中国製の唐物で、日本で焼かれたやきもの、すなわち和物の茶陶は一切、使われませんでした。しかし、日本で喫茶具が焼かれなかつたわけではありません。十四世紀〜十五世紀にかけて愛知県あいちの瀬戸窯では、唐物を写した天目や茶入などが焼かれました。しかし、和物喫茶具は書院茶湯では使われませんでした。和物喫茶具は、寺院や市中の日常の喫茶で使われたのです。

最初に、私は茶の湯は非日常の世界だと言いましたが、喫茶には非日常と日常の二重構造がありました。たとえば、「七十一番職人歌合」(東京国立博物館蔵)には、一服一銭いっぷくいっせんの茶売りの有様が描かれています。室町時代、寺院の門前や市中では、茶売りたちが一碗、銭一銭で庶民に茶を販売しました。日常の喫茶とはこのようなものです。このような日常の喫茶の場で、瀬戸の天目などが使われたと考えられます。しかし、続く戦国時代に、日常の茶が晴の場に引き出されるようになります。

数寄の登場

十五世紀後半、一四六七年～七七年の十年間、応仁・文明の乱が起こり、京都は焼き尽くされました。争乱は全国に飛び火し戦国時代が始まりますが、この頃に書院茶湯とは異なった新しい茶の湯が生まれました。これは当時「数寄^{すき}」と呼ばれ、後に千利休が「侘び茶」として大成した茶の湯です。数寄は十五世紀後半に奈良称名寺の僧珠光^{しゅうこう}が始め、十六世紀に珠光の娘婿の京都の宗珠^{そうじゆ}が活躍し、さらに堺の豪商、武野紹鷗^{のしょうおう}へと伝わります。数寄は戦国時代に大きく力を伸ばした堺・奈良・京都の町人たちを担い手とした茶の湯でした。

連歌師宗長が記した『宗長手記』と公家の鷲尾隆康の日記『二水記』には、珠光の後をうけ京都で活躍した宗珠について記載されています。『宗長手記』では、宗珠のもとを訪れた宗長が、近頃、数寄などい六畳や四畳半で茶の湯を行っている、これを「下京茶湯」というと記載しています。また『二水記』でも、下京の宗珠の「茶屋」を見学した隆康が、これが「山居^{さんきよ}の体^{てい}」をなし、「市中^{しちゆう}の隠^{いん}」であり、宗珠は数寄の張本人であったと言っています。数寄が四畳半や六畳の山里の風情を残した草庵^{そうあん}座敷^{ざしき}で行われたことが分かります。前代には十六畳ほどの広い会所座敷で、連歌や立花、香などの様々な芸能とともに書院茶湯が行われたのですが、「茶屋」の記述から、ここが茶の湯の専用空間と分かります。

歴博甲本の「洛中洛外図」（国立歴史民俗博物館蔵）には十六世紀前半の戦国期の町屋が描かれていますが、京都は道路が縦横に碁盤の目状に走っていますので、正方形の区画の両端に町屋が建っています。中央の空間地に建つ小さな建物が茶屋とされます。つまり市中の喧噪けんそうのなか、家奥で小さな草庵を建て数寄が行われたのです。これを鷺尾隆康は「市中の隠」と表現しました。

『山上宗二記』には、堺の数寄者、武野紹鷗の数寄屋の指図さしずが載ります。その数寄屋の広さは、四畳半で、中央に囲炉裏いろりが切られているのが特色です。これ以前の、書院茶湯では、茶は別の場所で点てられ会所に運ばれていました。しかし、この戦国期の数寄の時代から、茶室の中央に囲炉裏を切り、そこに釜を掛け、亭主が客の目前で点前をする。つまり、現在と同様の形式の茶の湯が始められたのです。かつて、日常の場で行われていた喫茶が晴の場に引き出されて「数寄」が成立したのです。もともと、書院を場とした茶がなくなつた訳ではありません。闘茶は次第に行われなくなりましたが、書院座敷の茶は戦国期、桃山・江戸時代へと続きます。

戦国時代に始まつた数寄についてまとめます。数寄は炉が切られた四畳半・六畳の茶屋を場に、主客しゆきやく同座どうざ、すなわち亭主と客が同じ空間で茶の湯を行います。客の目前で茶を点てますので、いかに見事な点前で点てるか、すなわち点前の作法が重要な役割となります。また、前代には「具足」と呼ばれるものが、「道具」と言われるようになります。「具足」から「道具」への変化は大変重要なことですが、長くな

りますのでまたお話する機会を持ちたいと思います。

数寄の道具

数寄がいよいよ流行する十六世紀前期、ちょうど一五三〇年代ころから、奈良の松屋、堺の天王寺屋などの大商人たちの「茶会記」が出現します。茶会記は茶会の記録のことで、客と亭主が集う茶の湯の会合である茶会もこの時期には成立したと考えられます。茶会記には、客の名前、茶会の順序、使われた道具などが記載されていますが、茶会記をもとに一五三〇年代以後に使われた道具を見て参りましょう。数寄の茶会では、前代の書院茶湯でも使われた唐物が使われます。しかし、全てが使われたわけではなく、この時代の茶人の鑑賞に堪^たえるものが選択されました。

最も珍重された唐物が茶壺と茶入です。これらには銘、すなわち名前が付けられ、名物めいぶつとなりました。茶会記には茶席で鑑賞した唐物茶入と唐物茶壺の特色が事細かに記載されています。これらの唐物名物は堺・京都・奈良の町衆茶人の間で転売され、驚くほど高価格となっていきました。

また、数寄には和物道具が使われました。十五世紀後半に数寄の茶の湯を始めた奈良の珠光しゆこうが古市播磨ふるいちはりまに宛てた「心の文」という書状が残りますが、その一節で、珠光は「此道」で一番大切なことは和と漢の

境目を曖昧にすることである。しかし、今「ひえかる、」と言い、初心者が備前物、信楽物を持つている。これは言語同断のことと戒めています。鎌倉時代から、信楽や備前の窯では、釉薬を掛けず長時間窯で焼成した丈夫な焼締陶器の甕・壺・挿鉢などの庶民の日常器を焼成しました。そこで数寄の道具が焼かれたのです。

その代表的なものに、信楽焼の「鬼桶水指」があります。これは、縁に帯を廻らせた筒型の焼締水指で、十五世紀後半の信楽の窯跡からはこの鬼桶水指の陶片が出土します。数寄の茶道具としてこのような水指が制作されたと考えられます。戦国期の茶会記では最も多く使用されるのは信楽焼水指ですが、十六世紀中期頃から建水も登場します。信楽焼では、棒の先と呼ばれる建水、挿鉢型建水などが伝世品として残ります。また、備前焼でも建水や水指が焼かれましたが、初期の茶会記にもっとも多く記載される備前焼は建水です。和物茶陶でも備前焼は建水、信楽焼は水指と使い分けられていたようです。しかし戦国期の備前建水は伝世しておりません。

ここで重要なのは和物茶陶でもっとも早く数寄の場に引き出されたのは水指と建水だということです。私は、書院茶湯の時代は、茶は別の場所で点てられていたが、数寄では亭主が客の目前で点前するようになったと言いました。つまり書院茶湯では、水指や建水は客の目に触れることがない裏の世界のものでした。しかし、数寄では建水や水指は茶室に運ばれ、唐物とともに暗の道具となります。珠光が語る和漢の

境を曖昧にするとは、前代の唐物の茶人や香炉、花入などに、和物の信楽水指と備前建水を使うという意味です。和物が登場したといっても全ての茶道具が和物となった訳ではありません。

戦国期の茶人たちは、唐物や和物の他にも様々な道具を選び取り、茶席に引き出していきます。たとえば唐物では灰被天目はいかつぎが登場します。前代の龍泉窯の青磁の釉色は美しい青緑色で、建窯の天目も優美な黒色ですが、灰被天目は黒釉の下に黄土が塗っているため、釉色が灰を掛けたようにくすみ、柔らかな趣をもちます。高台こうだいも大きく、口造りも鋭さが消えています。十三世紀頃に中国で生産されたものですが、この時代に数寄のなかで珍重されるようになります。朝鮮の李朝の窯で焼かれた高麗茶碗、東南アジアから輸入された南蛮水指なんばんすいさしなども新たに登場します。たとえば、高麗井戸茶碗こうらいいんどの「喜左衛門」は、大振りの形、柔らかな釉色、「かいらぎ」と呼ばれる高台の釉葉の縮れをもち茶人に好まれました。

戦国期の茶の湯のやきものをまとめてみましょう。前代から賞翫された唐物が使われます。なかでも茶入や茶壺は名物として珍重されました。灰被天目・高麗茶碗・南蛮物が新たに賞翫されはじめます。和物では、まず備前建水と信楽水指が用いられ、さらに十六世紀中期頃から瀬戸天目も茶会記に記されます。茶人たちは「冷え枯れる」という美意識をもとに、次第に侘わびたもの、粗忽そごなるものに美を見出します。しかし新しい唐物、高麗茶碗、南蛮物も全てが一般に手の入らない舶来の輸入品でした。茶会記には、優れた道具の条件に「ころ」「なり」「様子」が上げられます。「ころ」は大きさ、「なり」は形、「様子」は

その雰囲気です。この三条件を満たしたものが名物となり、驚くような高額で取り引きされるようになります。

戦国期のやきものを並べるとすぐにわかるのですが、器面に装飾が認められず、釉色に濃淡の差異はあっても色は単一です。現在の茶の湯では季節に応じて茶道具を変化させますが、この時代の茶人たちは、一年中、同じ道具を使用しました。季節感のない、重厚なモノクロームの世界が、この時代の茶の湯のやきものの実態です。

桃山時代の茶の湯とやきもの

桃山時代に入ると茶の湯に新しい展開が生まれます。「桃山時代」は美術史の時代区分で、日本史では安土・桃山時代といい、その始まりは織田信長が政権を確立した一五七〇年代前半に置きます。和暦でいえば、天正の初年です。この時代はさらに十六世紀末の慶長年間まで続きます。一方、日本陶磁史では一五八〇年代中期の天正一〇年後半に、時代の大きな劃期かつぎがあります。千利休が数寄を深化させ、侘数寄わびず、すなわち侘茶を完成させ、同時に和物茶陶は茶の湯の「規範きはん」を超えた創造の時代を迎えます。その傾向は、慶長から元和・寛永、すなわち江戸時代初期の十七世紀前期まで続きます。日本陶磁史における

桃山時代は美術史や日本史の時代区分から少し遅いのです。

茶会記が始まった一五三二年から一六一五年まで、つまり戦国から桃山時代の『松屋会記』『天王寺屋会記』などの茶会記の記事から茶碗のみを抜き出して、唐物、高麗物、和物、不明と産地別の比率みていきますと、面白いことが分ります。初期の頃、つまり一五三〇～五〇年代迄は唐物の比率が高いのですが、五〇年代から高麗物の比率が高まってきました。この時期は和物茶碗の比率は低いです。ところが、天正十四年（一五八六）に大きな変化があります。和物茶碗が急激に使われるようになり、高麗茶碗と並び、以後、比率が増加していくのです。まさに、和物茶碗が茶会の表舞台に登場したのでした。

ちょうど、その天正十四年頃の状態を利休の愛弟子の山上宗二が記した名物目録『山上宗二記』の茶碗の項目には、唐茶碗、つまり青磁などの唐物茶碗が廢れてしまい、当世には高麗茶碗、今焼茶碗いまやき、瀬戸茶碗が「なり」「ころ」、つまり形と大きさが良ければ、数寄道具になると記載しています。今焼茶碗は楽焼の茶碗、瀬戸茶碗は美濃焼の茶碗です。

茶会記で増加する和物茶碗は単に量が増えたというだけではなく、これまでの茶の湯の茶碗の「規範」を超えた「創造」があります。「規範」とは決まり事です。先にお見せしたような季節感のない重厚な世界での決まり事です。では天正十四年頃に急激に和物が増加する茶碗にはどんな「規範」があったのでしょうか。

書院茶湯時代から用いられたのは唐物の天目と茶碗です。天目は天目茶碗とも現在は言われますが、厳密には天目と茶碗は異なります。天目も茶碗は同じく口を開いた朝顔形ですが、天目の口縁は二段に折れ、これが亀の口に似るところから龜口べつこうといえます。天目の高台には釉薬が掛からず、胎土たんどが露出しています。一方、茶碗は高台裏まで完全に釉薬が掛かります。これは総釉そうぐすりといえます。これが、天目と茶碗の「規範」です。

十六世紀になると、井戸茶碗が茶の湯に取り入れられますが、これも総釉の朝顔型ですから茶碗の規範に相応しています。しかし、十六世紀後半に流行する和物茶碗はその規範を超えました。美濃焼茶碗も赤楽茶碗も高台は総釉ですが、その形状は腰に丸み持つ半筒形はんづつとなります。十六世紀末頃に美濃焼では、瀬戸黒茶碗が焼かれるようになります。腰をクッキリと折り曲げた筒形で、これは半筒型の延長です。ところが高台に釉を掛けていません。この茶碗は「総釉」という規範を超えます。十七世紀初頭、桃山時代末期ですが、この頃に美濃焼で白い釉薬をかけた志野しのが焼かれます。志野茶碗も瀬戸黒茶碗と同様に筒形で高台は露呈しています。しかし、この茶碗には模様が描かれます。これまでの茶碗には文様はありませんでした。志野に遅れ、江戸時代初期一六一〇年代に、美濃では織部おりべと呼ばれるやきものが登場します。織部茶碗の形は歪みひずみ、楕円形の沓茶碗くわちawanとなっています。戦国時代の茶の湯の規範は、この時代になると全く崩れてしまいます。桃山から江戸時代初期にかけて、自由で創造性をもつ様々な茶陶が日本の窯場で焼か

れるようになります。

千利休の茶の湯

では、最後に、桃山の創造の扉を開いた千利休、その指導をうけて長次郎が焼いた楽茶碗について触れておきましょう。

楽茶碗は、現在迄十五代続く、楽家の祖、長次郎によって焼かれた茶碗です。赤楽と黒楽の二種の茶碗が焼かれました。長次郎の父は飴屋あめやといひ中国の瓦職人でした。桃山時代には安土城や聚楽第などの巨大な城郭が建設され、ここでは最新式の明代の様式の瓦が使われたと考えられています。楽茶碗はこの瓦焼成の技術と類似します。長次郎も元は瓦職人と思われませんが、千利休に出会い、茶碗を焼成するようになります。

現在、これらを楽焼とか楽茶碗とか言いますが、「楽」という名称は十七世紀に入ってからの記録に現れ、長次郎時代には、今現在焼かれた茶碗という意味で「今焼茶碗」と呼ばれました。近年の研究では、長次郎以外にも楽茶碗を焼いた陶工がかなりいたことが分かってきました。千利休は、当時の茶の湯を展開させた茶匠です。元は堺の納屋衆なやしゅう、つまり倉庫業を営む商人でした。堺の武野紹鷗、北向道陳きたむきどうちんに茶を学

び、その才能を認められ、織田信長、豊臣秀吉の両天下人の茶堂さどうとなり、侘数寄、すなわち侘茶を大成します。『山上宗二記』には、利休は六十歳迄、師紹鷗の茶の湯の法度はつとを守ったが六十一歳から自らの茶の湯を始めたと記されています。ちょうど、天正十年に信長が死没し、利休が秀吉の茶堂になった頃です。また、天正十四年の『松屋会記』には「宗易形の茶ワン」が使われたとの記事があります。宗易そうえきは利休のことで、この頃に彼は自らの好みを体现させた長次郎茶碗を完成させたと思われる。

天正十年、すなわち利休が自らの茶の湯を始めた頃に「待庵たいあん」という茶室が建設されました。待庵は、京都山崎の妙喜庵という禅宗寺院にあります。二畳で半畳の床が付いています。紹鷗が好んだ四畳半の茶室を、利休は一挙に二畳にまで狭くしました。待庵には北西の隅に炬が切られ、そこで利休が点前をしますが、客は一人か二人しか座れません。室内の天井は竹天井、壁は土壁で侘びたものです。南側には客の出入りのため「にじり口」が付きます。客はここからにじりながら暗い侘びの小座敷に入る訳です。この座敷に相応しいものとして、創始されたのが長次郎茶碗でした。利休は二畳の他にも、三畳、三畳だぶめ台目の小間の茶室を好み、天正十年以後、この小座敷が大流行します。空間が変わるのですから、当然、ここに使われる道具も変わります。

たとえば、床に置かれる花入は、前代は唐物の青磁や古銅花入でしたが、籠や竹花入が用いられるようになりました。利休は自ら竹を切り、籠を編んで花入を作りました。また、抹茶を入れる容器は、前代は

唐物茶入を用いましたが、利休はそこに木製の棗なつめや金輪寺きんりんじなどの茶器を加えます。長次郎茶碗のみならず、様々な侘茶の道具を利休は創始しました。

長次郎茶碗の諸相

長次郎茶碗について詳しくみていきましょう。現在、伝世の長次郎茶碗は十数碗ありますが、最も古いのは「道成寺」のように口縁が外反した茶碗と思われれます。天正八年の茶会記に「ハタノソリタル茶碗」とあり、この時期にはこの形が登場したと思われれます。続いて「無一物むいちぶつ」のような半筒形の茶碗が完成されたと思われれます。長次郎茶碗は赤楽から始まり黒楽が焼かれるようになりますが、無一物と同じ形の「大黒おおくろ」が次のタイプでしょう。

「無一物」も「大黒」も作為のほとんど無い素直な半筒形茶碗ですが、次に置くことができるのが作為の強く現れた「俊寛しゆんかん」と考えられています。この茶碗の作為は、作者の個性などではありません。たとえば、「俊寛」の向かって左側の胴はわずかにくぼんでいます。ここに左手の親指を置きます。腰の左下の一部分は平らに作られています。ここに左手の掌が当たり、茶碗が手にすっぽりと収まるように作られています。口を付ける場所は薄く削られ、内側面の下方は大きく削られています。これは茶筌で

攪拌しやすい工夫です。内底には茶をためる茶溜ちやだまりがあります。「俊寛」には茶を飲むための工夫が随所に見られますが、それが作為です。天正十四年に「宗易形の茶ワン」が茶会記に登場することはすでに申し上げました。この「宗易形」が素直な無一物や大黒形か、作為の強い俊寛形か論議されていますが、私はこの俊寛形ではないかと考えています。

では、技法上の特色を纏めてみましょう。通常、茶碗は轆轤たづなで成形されますが、長次郎茶碗は手捏てづくねとヘラ削りです。つまり、土の塊かたまりを手で茶碗の形に成形し、その後へらに篋へらで好みの形迄削るのです。この成型法では作者の手癖てくせが必ず現れます。お気づきの方も居られると思いますが、長次郎茶碗には銘がありません。これが長次郎茶碗と判定できるのは、工人の手癖てくせが現れているからです。もともと長次郎の工房には数人の工人がいたようですので、数種の手癖のある茶碗が認められます。

続いて焼成ですが、これは内窯うちがまという小さな窯で一碗一碗を焼きます。赤楽と黒楽は異なった窯で焼かれ、黒楽の窯の方が高い温度が出せますが、何れも低い温度の焼成です。楽茶碗で茶を飲むと分かるのですが、熱の伝導率が低いため湯の熱さが手に伝わりません。肌合いは柔らかいです。これは低火度焼成によるものです。赤楽の場合、成形後に全面に赤土を塗り、上から透明の鉛釉をかけ、八〇〇度位で焼きます。黒楽の場合、鉄分を多く含む加茂川黒石を砕き、そこに珪酸鉛けいさんなまりを入れます。ふいごを使い一、〇〇〇度程度まで窯の温度を上げます。また、黒楽茶碗は引き出し黒といって、真つ赤に焼けた茶碗を窯から引

き出し急冷させます。そうする艶やかな光沢が生まれます。

長次郎茶碗はその形状、肌合いの全てが茶を飲むために作られたものです。天正後半に完成した長次郎の楽茶碗はまさしく、桃山の和物茶陶の創造の扉を開いたやきものでした。

桃山茶陶の創造

これ以後、慶長から元和・寛永期、すなわち陶磁史における桃山時代後半には、多くの窯で優れた茶の湯のやきものが焼かれます。茶の湯のやきものの講座はここからが本番となりますが、もう時間がなくなってきました。これは、次回に譲りますが、予告編として、これら創造性に溢れた様々な茶陶を一瞥しておきましょう。

まず、美濃焼の茶陶です。これについては規範を超える創造の部分で少しお話しましたが、桃山の創造は天正後半の瀬戸黒、黄瀬戸に始まり、慶長期には志野・織部などが焼かれるようになります。戦国期の茶の湯から信楽水指や備前建水が登場しますが、慶長期になると、歪みひずを特色とする造形性あふ溢れた茶陶生産が始まります。さらに伊賀焼という新しい焼締茶陶の窯が登場します。西日本の窯も忘れてはなりません。唐津の窯は天正末年頃から操業していますが、その他は文禄・慶長の役、秀吉の朝鮮出兵の帰陣の折

に、諸大名が朝鮮陶工たちを連れ帰り、開窯させました。これらの窯では慶長から元和・寛永、すなわち江戸時代初期に多くの優れた茶陶を焼くようになります。

講義をお聞きになった皆さんのうち、やきものに詳しい方は、ご自分が知っていることと違うと思われる方も居られたかもしれません。実は、やきもの研究は、考古学の発掘により、この二十年間で急激に進みました。本講義は、その最新の研究成果を盛り込みました。